

セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No.54

編集・発行 佐賀県立九州陶磁文化館

発行年月日 2018. 3. 23

〒844-8585 佐賀県西松浦郡有田町戸約乙3100-1

TEL.0955-43-3681 FAX.0955-43-3324

<http://saga-museum.jp/ceramic/>

E-mail: kyuto@pref.saga.lg.jp



さびるりせいじゅうはすさぎもんりんかみつあしざら
〈銹瑠璃青磁釉蓮鷺文輪花三足皿〉

肥前・有田

1640年代

九州陶磁文化館所蔵

小荷田謙一氏寄贈

佐賀県重要文化財(工芸品)

1640年代、色絵の生産が本格的にはじまる前夜に作られた初期伊万里の名品。

型打と手彫で蓮池の鷺を細密に表現、当時使いうるほとんどの色釉(青磁・瑠璃・鉄・透明)を駆使し、歪み無く焼成した渾身の仕上がり。

表の蓮鷺文や口銹、裏の側面の鉄漿とその上に瑠璃釉で描かれた丁子文は、三足を形成する龍のような神獣文と共に、当時最先端の中国磁器を意識したデザイン。

類似する陶片が、有田町の白川川採集品や窯付近の出土品で見られることから、山小屋窯で焼成された可能性が考えられている。

平成30年、佐賀県重要文化財(工芸品)に指定。

～平成30年度特別企画展のお知らせ～
寄贈記念

「中島宏氏寄贈 古武雄^{こだけお} ～ふるさと大地の記憶～」

青磁の重要無形文化財保持者(人間国宝)であった故 中島宏氏は、自分自身の作陶に精進するとともに、作陶のルーツである肥前地域の陶磁器の研究と収集を行われました。とりわけ、生まれ育った武雄市弓野地区をはじめとした武雄地域の陶器収集には、ひとかたならぬ熱意と愛情をもってとりくまれ、その収集品を、古い武雄焼:「古武雄^{こだけお}」として、図録の刊行や展覧会で発表してきました。武雄地域は、江戸時代初期から幕末・明治維新を経て現代に至る肥前陶器の一大生産地であり続けました。当展覧会は、幕末・明治維新期までの古武雄を通覧するものです。

中島氏の収集品や展覧会によって、その躍動感あふれるデザインや色づかい、コントラストが効果的でリズムミカルな連続文様、即興的に掛け流した色鮮やかな釉^{うわぐすり}などをもつこの陶器は、その芸術性が高く評価されています。

このたび、中島宏氏から、約600件もの古武雄が佐賀県立九州陶磁文化館に寄贈されたことを記念し、郷

土の土と炎が生み出した力強い造形の世界を堪能いただくため、その収集品の中から選りすぐりの逸品を展示します。

○主 催 佐賀県立九州陶磁文化館

○会 場 第1～3展示室

○会 期 平成30年10月6日(土)～

11月25日(日)

○休 館 日 月曜日(祝日は開館)

○展示構成

「大皿」躍動感と迫力ある大皿の名品たち

「松絵の甕」松絵などが描かれた多様な甕類

「刷毛の妙義」刷毛や筆を用いた白化粧^{しろげしょう}の世界

「象嵌のリズム」印判を表面に押してあらわされる

象嵌文様

「釉薬^{いろどり}の彩」緑と褐色の釉が織り成す文様

○観 覧 料 有料



鉄絵緑彩松樹文大皿
1620～1640 年代
佐賀県重要文化財



印花文双耳水指
1600～1640年



鉄絵緑彩型紙摺花文大皿
1610～1640年代



印花文盃台
1600～1640年代



印花文茶碗
1610～1640年代



緑褐釉櫛目草文大皿
1650～1690年代



印花鶴文大瓶
1630～1650年



白泥鉄絵緑彩松樹鶴文甕
1650～1670年代



緑釉刻花唐花唐草文五耳壺
1650～1690年代



印花鶴文大皿
17世紀中頃～後半



緑褐釉流掛刻花唐花唐草文六耳大壺
1650～1690年代



打刷毛目花文大皿
1690～1740年代



鉄絵緑彩松樹文甕
1670～1730年代

テーマ展1

「幕末明治 有田の豪商展-蔵春亭^{ぞうしゅんてい}
と肥磔山信甫^{ひちょうざんしん ぽ}-」

天保12(1841)年に有田焼のオランダ貿易の一手販売を始め、独占的に海外貿易を展開した蔵春亭、久富与次兵衛と安政3(1856)年にそれを引継ぎ発展させた肥磔山信甫、田代紋左衛門の二人の幕末明治の有田の豪商とその製品などを紹介し、明治維新期の海外貿易と慶応2(1867)年第2回パリ万国博覧会当時の有田焼の歴史を振り返ります。

- 主 催 佐賀県立九州陶磁文化館
- 会 場 第1展示室
- 会 期 平成30年8月3日(金)～9月2日(日)
- 休館日 月曜日(祝日は開館)
- 観覧料 無料



色絵東屋山水草花蝶文大瓶
肥前有田窯 蔵春亭三保造 1840～1860年代
柴田夫妻コレクション



色絵果実文洋食器セット
肥前有田窯 肥磔山信甫 1840～1870年代
有田 田代家寄贈

テーマ展2

「有田焼^{ばんこうがま}晚香窯展-明治・大正・昭和
の窯元の軌跡-」

赤絵屋から窯元へと変わりながら続く有田焼の窯元 晚香窯の豊富な資料を展示し、明治～昭和の有田焼の歴史を振り返ります。

- 主 催 佐賀県立九州陶磁文化館
- 会 場 第1展示室
- 会 期 平成30年12月15日(土)～
平成31年1月14日(月・祝)
- 休館日 年末(12月29～31日)、月曜日(祝日は開館)
- 観覧料 無料



色絵岩梅牡丹孔雀文大皿
有田 庄村健吉(初代晚香)
大正時代初期
庄村健氏所蔵

～平成29年度特別企画展の報告～

熊本地震復興祈念 特別企画展

熊本のやきもの

○趣 旨

江戸時代前期から多様な陶磁器を育んできた肥後・熊本と肥前・佐賀長崎は、古代から強い絆で結ばれた同じ「火(肥)の国」であり、両者は陶磁文化においても深い関わりがあります。肥前・佐賀の地から熊本地震復興を願って、長い伝統をもつ肥後・熊本の陶磁器の豊かな美と力強さを紹介しました。

○展示構成

- 第1章 県北地域：小代焼しょうだいなど25件51点
- 第2章 県央地域：網田焼あうだ・松尾焼まつおなど20件32点
- 第3章 県南地域
 - 1)八代焼やつしろ(高田焼こうだ)など31件54点
 - 2)一勝地焼いっしょうち・上村焼うまむらなど15件24点
 - 3)高浜焼たかはま・水の平焼みず だいらなど26件56点
- 第4章 熊本と熊本ゆかりの現代作家
13件16点

○主 催 佐賀県立九州陶磁文化館

○会 場 第1～3展示室

○会 期 平成29年10月6日(金)～
11月26日(日)46日間

○休 館 日 月曜日(祝日は開館)

○出品件数 約130件233点

○観 覧 料 有料

○展示解説 毎週土曜日

○講 演 会 平成29年11月4(土)

○音 楽 会 平成29年10月29日(日)



開会式ギャラリートーク

第114回有田国際陶磁展

○会 期 平成29年4月29日(土・祝)～5月7日(日)
9日間

前回から海外作品も含む公募展となり、今回も国内外から多くの作品が集まりました。美術工芸品・オブジェ部門の第1位「無限」(松永好昭氏)をはじめとする入賞・入選作品90点のほか、産業陶磁器部門の一部の入賞作品が展示されました。



「無限」
松永好昭氏作(2017年)
文部科学大臣賞受賞

新収蔵品展

○会 期 平成29年12月9日(土)～
平成30年1月14日(日)31日間

平成27・28年度に寄納・購入した陶磁器の中から、148件(242点)を展示しました。今回は、肥前陶磁の名品に加え、熊本の小代焼101点から成る古賀コレクション、近現代の有田焼、九州の近現代陶磁、関西地方や中国・景德鎮の陶磁器をご紹介します。

○展示解説 毎週土曜日



古賀彌一郎コレクション

ヨーロッパの肥前陶磁器を訪ねて 13

英国の肥前磁器コレクション その5

Hizen Porcelain Collections in the UK

ジェニンズ(Jenyns)コレクション その2

「セラミック九州No.45」pp.4-5に、1931年から1968年まで大英博物館の東洋美術部門の学芸員であったソーム・ロジャー・ジェニンズ氏(Soame Roger Jenyns)の自宅に残された肥前磁器の一部を紹介したが、今回はケンブリッジ(Cambridge)大付属のフィッツウィリアム(Fitzwilliam)美術館の学芸員の選沢で、ジェニンズ氏の自宅から美術館に寄託され、公開されている主に染付の大皿類と柿右衛門様式の色絵の各種の器物の他に、公開されずに美術館の収蔵庫に眠っている興味深い品々があることを、2016年、2017年の調査で実見したので、それを今回は紹介し、皆様のご意見を伺いたい。なお、ジェニンズ氏については、前掲書で、その経歴と活動をお読みいただきたい(注1)。

まず注目したのは、3個の有田の染付のチョコレート・カップである(図1-4)。そのうちの2個は対で、高台内に恐らく宣徳年製の銘を写したと思える銘と、見込みには五弁花が描かれ、口径8.8cm、高さ8.75cmで、外側の文様は口縁に2本の圈線、その下の草花文は、太湖石から桜の木が伸び、その枝に鳥が止まっている面と、太湖石から竹が伸びている文様の面とがあり、その下に2本の圈線、細い線描きの剣先文、その下の高台際に1本の圈線が引かれている。この美術館で受け入れた時にChristiesによって作られた蔵品目録には、19世紀の有田のそば猪口で、一対で300ポンドと記されている。

残る1個(図3・4)は、「セラミック九州No.47」p.5で紹介した染付草花文のチョコレート・カップ(図5)と瓜二つである。後者は2007年4月に中島寿子氏がメキシコ旅行中にオアハカ(Oaxaca)の文化館に展示されているのを見つけ、その前年の2006年に筆者が



図1



図2

図1・2 染付草花文碗 有田 1660～1680年代
フィッツウィリアム美術館所蔵(イギリス・ケンブリッジ)

TANAKA, Shigeko

田中恵子

- 日本アジア協会副会長
- 東洋陶磁学会(日本)会員
- The Oriental Ceramic Society (London) 会員

キューバのハバナ(Havana)で旧市街出土品の中に見つけた図6の類品ではないかと写真を撮り、筆者に送られたものである。この2点の写真をその都度、九州陶磁文化館の大橋康二氏にお送りしたところ、両者とも1660～1680年代に有田で焼かれた染付草花文のチョコレート・カップである可能性を指摘された。

2008年には、筆者がスペインの東方貿易港のカディスに何かあるのではないかと訪ねた際に、考古博物館に中国陶磁として展示されていたチョコレート・カップ(図7)の破片を見つけ、その写真を大橋康二氏にお送りしたところ、その芙蓉手の文様の特徴から同じく有田で1660～1680年代に焼かれたものとの御教示を得た。



図3



図4

図3・4 染付草花文碗 有田 1660～1680年代(表裏両面)
フィッツウィリアム美術館寄託(イギリス・ケンブリッジ)



図5



図6

図5 染付草花文碗 有田 1660～1680年代
オアハカ文化館所蔵(メキシコ・オアハカ)

図6 染付草花文碗 有田 1660～1680年代
ハバナ考古博物館所蔵(キューバ・ハバナ)



図7



図8

図7 染付草花文碗 有田 1660～1680年代
カディス博物館所蔵(スペイン・カディス)

図8 染付草花文碗 有田 1660～1680年代
国立装飾美術館所蔵(スペイン・マドリッド)

2009年にはマドリッドの装飾美術館所蔵品で、由来はわからぬもののオアハカの草花文に類似の完品のチョコレート・カップ(図8)を見つけた。時期を同じくして長崎大の野上建紀氏のフィリピン、メキシコの発掘調査で有田の染付磁器が確認されていることもあり、筆者は、有田焼のチョコレート・カップの輸出ルートは、長崎からマニラまで中国商人が運び、マニラからメキシコ、キューバを経てスペインへはスペイン商人が運ぶルートがあり、17世紀後半の一時期、オランダのVOCとは別のスペイン人商人による、二つの大洋を越える東回りの肥前磁器のヨーロッパへの輸出ルートがあったのではないかということを確認するに至った。

ジェニズ氏のこのチョコレート・カップは、高さ9cm、口径7.9cm、高台の径3.8cmで、高台の付け際に染付で二重圏線が引かれ、草花文は前述のハバナのような柔らかみはなく、オアハカのように硬い類型化した描き方である。高台内に圏線が1本巡らされているが銘はなく、見込みにも何も描かれておらず、口縁に圏線もなく傷もなく完品である。美術館で受け入れた時の蔵品目録には1700年頃のそば猪口で、50ポンドとの評価がついている。

完品であるということはどこかで大切に所蔵されていたものといえるだろうが、それをジェニズ氏はどこで手に入れたのであろうか。氏の祖先代々住まう1700年代に建て直されたマナー・ハウスに昔からあったものか、氏のご子息に尋ねてみたが、その家には蔵品目録というものはなく、また男子には幼い時から寄宿学校で教育を受けさせる英国の貴顕の習慣に従い、この家でも代々、男子はイートン(Eton)校へ送られ、休暇で家に戻っても父親と過ごす時間は限られていたので、なにも父親から聞いていなかったとのことであった。

次にジェニズ氏がその著述の中に何かチョコレート・カップについて言及しているかどうか、ロンドンの東洋陶磁学会(OCS)の紀要に収録の氏の論文10篇と、1965年にFaber&Faberから出版され、1976年の氏の死後、1979年に再版された「Japanese Porcelain」を調べたが見当たらず、肥前磁器のスペイン商人によるマニラから東回りの輸出への言及もなかったので、氏は恐らくメキシコでの東洋陶磁の出土遺物に接する機会がなかったのではなかろうか。ご子息の話では、ジェニズ氏は1925年から1933年の香港駐在中にマニラに行ったことはあるが、メキシコやキューバへは行かなかったのだ、恐らくロンドンで買ったものであろうとのこと、そうなるこの完品のチョコレート・カップはどこかのコレクションに入っていて、実際には使われず、大切にされる値打ちのあった器物だったのであろうか。

メキシコから大西洋を越えてスペインのカディス港までの海上で、英国の海賊に襲われ、奪われたスペイン商船の積み荷にたまたま東洋陶磁が入っていて、その中に肥前のチョコレート・カップがあり、それが当時、海賊船に資金を出していた英国貴族のコレクシ

ンに入り、第二次大戦後のオークションに柿右衛門様式の肥前磁器と共に出て来て、ジェニズ氏に関心を持ち、氏のコレクションに入ったが、氏の研究がチョコレート・カップに及ぶ前に死去したという見方でもできるかもしれない。

ロンドンまでの経路を考えた場合、「海を渡った肥前のやきもの展」図録(九州陶磁文化館1990)に掲載されたインドネシアのパサリカン遺跡出土のチョコレート・カップNo.130もジェニズ氏所蔵品に類似の草花文であるが、ここのはスペイン商人ではなく、オランダVOCが運んだものであるとすると、この文様のチョコレート・カップが有田で大量生産され、長崎を出る時に二手に分かれて最終的にヨーロッパを目標にしたといえるのであろうか。

英国のコレクションの中にある肥前染付のチョコレート・カップとしては、「セラミック九州No.46」pp.4-5に紹介したディラム・パーク(Dyrham Park)という貴族の館に、中国のチョコレート・カップと1点ずつあるが、ドレスデン(Dresden)のアウグスト強王(Augustus the Strong)の蔵品であったことを示すヨハネウム・マーク(Johanneum Mark)が刻まれていることから、これはオランダVOCの扱いでドレスデンに入り、後年オークションに出された時に、この屋敷の当時の主が皿類と一緒に買い入れたもので、スペイン商人経由ではないことがわかる。

「セラミック九州No.53」pp.4-5でも大型の明治の輸出磁器の同じ銘の記された品が非常に離れた地域で発見されることを示したが、チョコレート・カップのように移動が容易な器物の分布はさらに広がるに違いなく、特にこの文様のチョコレート・カップの情報を皆様から頂戴できればと願っている。

筆者が「セラミック九州No.50」p.7図10に示し、同No.51 p.4で報告したイタリアのシシリ島のパレルモに残る色絵花卉文蓋付大壺(前掲書、図1)と、ジェノヴァの色絵花卉文蓋付大壺(前掲書、図2)と筒型大瓶(前掲書、図3)について、長崎県文化振興課の松下久子氏が2017年の在イタリアの漆装飾が施された肥前磁器の調査で詳細に調べた結果、すべて色絵装飾で、漆装飾は施されていないとの報告をいただいたので、ここに記して感謝の意を表したい。

これまでに報告した日本からの調査がなされていない肥前磁器を見に行かれた方からの専門的なご報告をお待ちしている。

注1 「セラミック九州」のバックナンバーは、九州当時文化館のホームページで公開中。
(<http://saga-museum.jp/ceramic/yakimono/house.html>)

注2 図6-8の他の写真については、次の論文掲載の写真を参照。
田中恵子2010「メキシコ、キューバ、スペインでの4個の肥前染付チョコレート・カップの発見ー17世紀のスペイン貿易による知られざる肥前磁器の交易ルートー」『世界に輸出された肥前陶磁』九州近世陶磁学会

肥前陶磁の見どころシリーズ(1)

鍋島の野菜尽文皿 ~シンプルに進化するデザイン~



図1 出光美術館所蔵
(口径19.2 高4.4 底径9.8cm)



図2 九州陶磁文化館所蔵 小荷田謙一氏寄贈
(口径20.5 高6.0 底径10.9cm)



図3 出光美術館所蔵



図4 九州陶磁文化館所蔵

鍋島の色絵野菜尽文皿は複数の種類が知られ、特に出光美術館所蔵品(図1)は珍しく有名であるが、各地の出土品(図9-11)や複数の伝統品と同タイプの作品が、当館の所蔵品にも加わった(図2、注1)。

両者は裏文様が異なり、前者には唐草文(図3)、後者には七宝結文(図4)が描かれる。

唐草文は七宝結文より先行し、唐草文の例は、東京・加賀藩屋敷跡の天和2年(1682)火災盛土出土の、いわゆる初期鍋島、そして、七宝結文の例は、東京・丸の内三丁目遺跡の元禄11年の勅額火事(中堂火事、1698)以前の層や大阪・佐賀藩蔵屋敷跡の妙知焼、享保9年(1724)火災関連遺構出土の、いわゆる盛期鍋島が知られている(注2)。

表文様の野菜文には、面白い相違点がみられる。輪郭線を重ねると、全体では一致せず、右上方と左下方の2グループに分かれて重なる(図5・6)。文様も一部異なり、前者の唐辛子の葉の一部が後者では消える。2グループが近接する上部では、後者のグループ間が30°離れるが、空いた場所に豆の花と唐辛子の葉、瓜の一部が再配置される。また、中央左端の葉が、瓜から茄子の葉に変わり、実と葉の対応関係も整理される(図7・8、注3)。

表文様の色彩はコントラストが強まり、前者では緑の唐辛子の葉・上方の豆が、後者では濃淡のある染付に変わる。

以上から、定評ある文様も原図を生かしつつ細部に修正を加え、シンプルで力強い表現に変化したことが分かる(注4)。デザインが変化した背景には、佐賀藩が鍋島焼改良の指示を出し(注5)、職人たちが試行錯誤する様子が垣間見える。

(山本文子)

注1 鍋島野菜尽文皿の出土例は次の通り。愛知・岡崎城跡(図9、岡崎市教育委員会提供)、佐賀・鍋島藩窯(図10)、東京・日本橋二丁目遺跡(日本橋二丁目遺跡調査会2001『日本橋二丁目遺跡』巻頭カラー図11より転載)。

注2 大橋康二2002『鍋島焼の編年についての考え方』『青山考古18号』、東京大学遺跡調査室2016『医学部附属病院入院棟A地点』、東京都埋蔵文化財センター1994『丸の内三丁目遺跡』、大阪文化財研究所2012『佐賀藩屋敷跡発掘調査報告』。

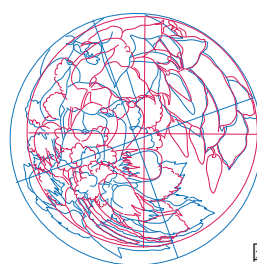


図5

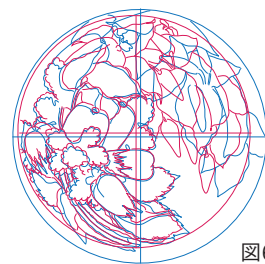


図6



図7



図8

* 輪郭線 赤：出光美術館、青：九州陶磁文化館

* 灰色：相互に文様の異なる部分



図9
岡崎市教育委員会所蔵



図10
伊万里市所蔵



図11
中央区教育委員会所蔵

注3 当館所蔵品の表文様の左下方の文様グループを、出光美術館所蔵品の表画像(図1)に合わせると、当館所蔵品の裏文様の配置が回転するため、天地の向きも変化していることが分かる。

注4 デザインの転用には、同じ文様を写すことのできる「仲だち紙」(『セラミック九州No.47』p.8参照)の使用が考えられる。

注5 元禄6年(1693)、第2代佐賀藩主鍋島茂茂が有田皿山代官に鍋島焼の改良を指示し(「有田皿山代官へ相渡す手頭」)、有田の優秀な陶工の引き抜き、御道具山役副田氏の解任を行うなど鍋島藩窯の改革を行ったことが知られている。